

# 1. 附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター 令和4年度の主要活動と総括

渡 辺 晋 生

附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター長

フィールドサイエンスセンター（FSC）の主要課題として、「教育の充実」、「研究の推進」、「社会貢献」があげられる。これらを踏まえて令和4年度のFSCの主要活動を総括する。

## 教育の充実

平成27年度より、生物資源学部の教育理念である「山の頂から海の底までを理解させる」ことを目的に、1年生向けの必修科目「FSC体験演習」を開講している。オンライン開講となった令和3年度とは異なり、令和4年度は対面での開講を再開したが、コロナ禍で乗車定員が半数に制限されたためバスを倍増させて対応した。コロナの罹患が疑われる体調不良者や様々な配慮を必要とする学生など安全に対し、特に配慮しての開講となった。これらの作業には学務担当と授業担当教員で丁寧に対応した。初年次が開講されるこの体験演習は、生物資源を「見て、触って、考える」教育の基礎を成し、また学生によっては多様な生物資源の附属施設を体感することができる唯一の機会にもなり得る。担当する教職員数も多く、通常の講義以上に運営にも労力を要する授業ではあるが、こうした生物資源のフィールドにおける団体行動の体験は座学では得られない貴重な教育効果を持つと考えられる。

各施設は、2年生以上の学部生や大学院生に対する多くの教育活動も行っている。各施設とも沢山の実習や演習を開講しているだけでなく、学部教員の実験実習の一部や、学部学生の卒業研究、大学院学生の修論・博士研究にも施設が使われており、その存在意義は大きい。各施設

で行われた具体的な教育研究内容は、本書の「センターを利用した教育研究実績」を参照されたい。

## 研究の推進

各施設の専任教員は、それぞれ独自に、あるいは学内外との共同研究によって研究を推進している。技術職員においても、独自に共同研究に取り組む例もある。また、学部教員も施設を使った研究を実施しており、令和4年度の研究推進目標は達せられたと判断する。各施設における具体的な研究内容は、本書の「センターを利用した教育研究実績」を参照頂きたい。

但し、農場と演習林については、コロナ禍を経て状況に変化があるものの、未だ自己収入の点での貢献も意識される。このため、技術職員の目がそちらを向いてしまいがちであり、教育や研究とのバッティングも見受けられる。生産額は個々の技術職員と照らしあわせが容易なため、技術職員の目がそちらに向きがちなのは理解できるが、この点は原点に立ち返って本来の業務を再確認し、教育・研究に支障の出ない仕組み作りを考えていく必要がある。

## 社会貢献

農場では、地域の小・中学生を対象とした「教育ファーム」を令和3年度より再開した。一方地域住民を対象とした「大学ファーム」や農産物の直販会は、本年度も再会できなかった。また、高野尾地区活性プロジェクトとの連携を図り、「朝津味」や「道の駅」への農産物の出展、花街道プロジェクトとしての農場外法面の整備

などを行っている。

演習林では、津市の美杉木材市場記念市や伊賀市のマルタピアへの演習林産品を出展した。みえ森林・林業アカデミーとの連携事業なども今後取り組んでいきたい。

また、各施設の教員は、それぞれの分野の専門家として、市・県・国の委員会等に参画し、社会貢献を果たした。

## まとめ

FSCに要求される事柄が多岐にわたり、また、その質もより高いものが要求されているにもかかわらず、教職員一体となって全体にうまく対応していると判断している。但し、一部には要求の増加に応えられず、本来の業務である教育・研究の質の低下が見受けられる点もあることから、効率的な業務遂行のできる環境やルール作りと、その運用法の確立がかねてよりの重要な課題である。なお、全学の技術職員の技術発表会にも協力し、三重大学技術部としての職責も果たした。FSC技術部としての協力体制も構築しつつある。

また、農場においては国立大学法人設備整備費補助金令和4年度第2次補正予算教育設備で、ロボット草刈機や農業用ドローン、直進アシスト付きトラクターを導入した。そして、これらの運用に必要な屋外への電気コンセントやアクセスポイントなどのインフラ整備も総合情報処理センターや研究科の補助で可能となった。本格的な運用は次年度以降となるものの、ここに至るまでに多くの方のサポートをいただいております。感謝するとともに、FSCを起点とした生物資源関連産業をDXで支える地域人材の育成や、脱炭素社会に向けた教育、研究、社会貢献への今後の貢献を期待している。